

中世インド初期封建制社會に

おける自由思想家の検討

大類純

インドにおいて、古代奴隸制度が崩壊し、いわゆる中世に

おける初期の封建的諸關係が発生したのは、四世紀ないし六世紀と査定できると思う。グプタ帝國は古代インド、ないしアジアにおける最大の文化の中心の一つであつたが、この奴隸制國家の崩壊は、奴隸制國家が支配した時期（古代インド）と封建制國家が支配した時期（中世インド）とを區畫する歴史的境界線とすることができる。グプタ帝國の最盛期は四世紀後半から五世紀前半にかけてであり、とくにチャンドラグプタ二世の統治時代（380～414AD）であつた。しかし、強大なインド帝國にも崩壊の徴候が現われ、五世紀の中頃からその様相が顯著となつた。その政治的弱體化は、奴隸制の危機と封建制の諸要素の芽生えが直接の原因となつてゐる。この時期の史料が餘りに稀少であるため、充分な時代省察の検討を加え、明らかにすることができないが、要するに生産力の到達した水準が、奴隸制を歴史的に一段と進歩した搾取形態に

移行せしめたのである。

封建時代の支配的イデオロギーであつたのは「宗教」である。法制・習俗・文藝・道德・政治・哲學的人世觀等のほとんどあらゆる分野の社會的イデオロギーが、根底には宗教的性格をおびてゐた。反封建的運動もまた、「宗教」の旗印のもとに展開された。反面、封建的インドの社會體制の特殊性（封建的國家の土地所有制・土地共同體體制・カーストの分化等）は、その宗教體系に、またこれらを通じて中世インドのイデオロギー全體に對しても、獨特の影響を與えた。しかし、この宗教的・神學的な外皮の中に、中世においてもまた全時代を通じて顯現される唯物論と觀念論の對決が明らかである。

初期封建制社會にあつては、インドの哲學思想は主として従前の主要な哲學學派の開祖たちのスートラに對する「註釋」のかたちをもつて展開されている。一例を挙げれば、ヴェーダーンタ學派において最も強烈に觀念論的學說を推進せしめ

た解釋學者シャンカラ（九世紀）は、その代表的なものであり、同様にサーンキヤ學派におけるイーシュヴァラ・クリシュナの「サーンキヤ・カーリカー」（三世紀頃）、著者不明の「ユクティディーピカー」（六世紀）、ガウダーバダーおよびヴァチヤスパティ・ミシュラの註釋書であり、ニヤーヤ學派の哲學體系に對してはヴァーツヤヤナ（五世紀）、ウッディヨータカラ（六世紀）、ジャヤンタ（十世紀）が最も重要な註釋家といえよう。ヴァイシニシカ學派のブラシャスタパダー（四世紀）の定説に對するシリダーラ（十世紀）、ウダヤナ（十世紀）もこの範例であり、プールヴァ・ミーマンサー學派に屬する學者やとくにクマールラ・バット（七世紀）とブラバークラの諸著作には、注目すべき中世インドの哲學思想が包含されている。佛教もまた例外でなく、その觀念論的諸學派がこの時期に廣く普及した。そして、この時期における最も特徴的な傾向は、古代の經典やカーリカーがそれ自體では必ずしも觀念論的解釋を施すのに充分な根據を與えていないのにもかかわらず、註釋において觀念論的かつ神學的に解釋と説得が與えられたということである。特に、ニヤーヤ學派とヴァイシニシカ學派においてこの傾向が顯著であり、それぞれ

の開祖によつて、最小の微粒子（極微・原子）の組織によつて世界が構成・發展したと説明されている根本的に唯物論學說であるものが、五世紀ないし十世紀に著わされた註釋書では、

全く趣きと學說を變えて、神學的觀念論をもつて解釋・説明が施されている。註釋者たちは不當にも、經驗的外界におけるあらゆる論理過程を、精神的原理（神・ブラフマン）の意志に従つて生起したものと見なすことを要求している。サーンキヤ學派もまた、これに酷似した學說上の改變を受けている（詳論省略）、封建時代初期の觀念論を最も明瞭・完璧に具現したのは、シャンカラの多くの論著である。

シャンカラとその後繼者たちは、ウパニシャッドの觀念論路線の繼承者で、超自然的な世界精神としてのブラフマンを唯一の實在とし、世界の基礎であると言明している。存在・意識はブラフマンの屬性と見なし、目に見える世界はブラフマンの現われと考えられ、ブラフマンは不思議な力（マヤー）の助けをかりてこの世界を創造する。しかしながら、これらが主張する非物質的精神を物質的世界に轉化して説明することゝ、遂にこれらはなしえなかつたことが指摘できる。

例えば、外的世界の非實在性について彼が擁護している「真理」は、通常の知覺や論理的考究では認識も、説明もされないもので、それはより次元の高い意識の状態、すなわち直觀（インテュイション）または恍惚（エクスタシー）によるか、または神聖な經典（ヴェーダとウパニシャッド）に説かれる啓示を通してのみ認容されるものである。これは、外的世界の唯物辯證法的解釋の見解に對して反駁する目的で主張されたも

のであるが、シャンカラは、社會意識においても、カーストによる社會構成と階級的差別に對してヴェーダらしいの長年
月による傳統によつて、これらは神聖なものとして是認され
るべきであるとした。このシャンカラの學說であるアドヴァ
イタ・ヴェーダーンタが、インド哲學思想における觀念論の
傳統の主流となつて、決定的影響を與へつづけた。

佛敎哲學もこの例に漏れず、中觀派も唯識派も觀念論學派
で、學者は論理的詭辯に等しい論法で、人間の知識の相對性
と可變性を利用して、意識をもふくめて世界に存在するもの
はすべて非實在的であると論證しようとするのが目的であつ
た。意識もまた空（シュニヤ）に過ぎないものであつた。唯
識派は、あらゆる存在するものは思考のうちにのみあつて、
思考から離れては一切の存在はありえず、從つてすべての世
界現象は思考の所産であるということを論據にして、意識の
みを唯一の實在であると主張した。

觀念論との激しい理論鬭争の中で、インド哲學固有の自由
思想ないし唯物論の思想的傳統を確守したのは、チャールヴ
アーカ・ローカーヤタ學派の後繼者たちであつた。封建時代
のローカーヤタ學派の見解をうかがうに足るまとまつた文獻
ないし典據は、今日では散逸して傳わらない。しかし、他の
學派の記述ないし論駁の中に、初期封建制下にあつてローカ

ーヤタの學說が廣く學界に流布していたことを示す記述があ
る。すなわち、「チャールヴァーカ學派はその學說が單純で
あり、論理的思索の構成において重厚・複雑さを缺いている
にもかかわらず、その學說にたち向うことは何よりも困難で
ある。というのは、ほとんどの人びとがそれを支持している
からである」と、この學派の世界觀が當時の民衆によつて最
も強く支持されていたことを證左している。

ローカーヤタ學派の哲學思想の主たる特色は、この時代に
においても古代奴隸制社會に引きつづいて、根源的な原始元素
（水・火・地・空氣）の組み合わせによつて全物質的な現象世
界が構成され、發展したというにある。またこの原始元素の
中に、現在考ふるエーテルに等しい物質をつけ加えたものも
ある。そして人間の「精神」の存在は認めたが、これを思考
ないし情緒器官の「ころろ」または感覺器官と同一に考え、
肉體の死とともにその存在は消滅するものであると考えた。
認識論の分野では、ローカーヤタ學派は從來通り感覺論の立
場に立ち、感覺・知覺をすべての認識の根本であり、始まり
であると思考した。この時代の二、三の著作の中には、ロー
カーヤタ學派が形式論理學上の推論の形式と方法論を客觀世
界を認識するための手段として容認しはじめたことを述べて
いるが、同時に觀念論者によつて創造された神の存在や靈魂
の不滅のような架空ないし抽象概念を證明するために、この

推論方式を利用することは拒絶した。これらに關しては、ジヤンタの「ニヤーヤ・マンジャリー」や、シャーンタラクシタ(C. 680~740)の「タットヴァサングラハ」に對するカマラシーラ(蓮華戒 C. 700~750)の註釋書の中に述べられている。一例を擧げるならば、カマラシーラは次のように述べる。「チャールヴァーカ派の學說の繼承者であるブランドラ(八世紀)は、わたしたちに知覺されることのできる一切の經驗的事物の本質を規定するに當つて、論理學的推論の方法が正しい認識手段として有效であることを認めている。しかしながら、この推論方式は、彼岸の超越的世界や、死後の世界や、カルマ(業)の法則等に關しては、いかなる命題の證明のためにも援用されてはならない。なぜならば、それらは通常の現實的・感性的知覺ではわたしたちに感得することができないからである」と。

これは最も科學的立場である。この主張ひとつにも明瞭に現われているように、ローカーヤタ學派は、つねに觀念の世界と現實存在の世界を嚴格に區別して、思索の對象としていたのであり、最も科學的・學問的態度を堅持していたものということができる。この點から、從來指摘されていたように、ローカーヤタ學派がカルマの法則を無視・否認していたと解釋・結論するのは、觀念論者の誤謬・誤解ということが明らかにされる。例えば、アーजीヴィカについての畏友雲井昭

善教授の研究雄篇³についても、これに關連類似するアーजीヴィカ學派について興味ぶかい檢討を加えることができる。雲井教授は「アーजीヴィカについて」の結論として三カ條を擧げ、その第二に、「アーजीヴィカに對するゴータマの批判は、他の學說、思想に對してとつたゴータマの寛容的な態度に比べて、嚴しい批判を以て答えていたということ」と列擧し、その資料として、(a)「人間が煩惱に汚されるのも清淨になるのも、すべて無因無緣である。善因善果、惡因惡果という如き因果關係は存在しない。善惡を自ら行うことも、他人に行わさせることもなく、努力精進もなければ自由意志とでもない。人間は、自然の定まり(niyati)自然の性質(bhava)によつて互いに異なるのであり、生れながらにして六種の階級に區別される」、(b)「恰も、糸まりが投げられた時、その糸まりの糸が解け終るまで解けるように、愚者も賢者も輪廻して後に苦の終りをなす」(D. I. pp. 38~4)を擧げ、「ここでは、彼の無因無緣論(Ahetu-apaccaya-vada)と努力無用論(運命論(Niyati-vada)とが、その思想背景となつてゐる。従つて、例のマツカリ・ヴァーダ(Makkhali Vada)において、業あらず、業果あらず、精進あらず」(A. I. p. 286)という批判と對照されるものである。この二つの思想が、ゴータマ佛陀をして『あらゆる沙門論師の中での最惡の論』(A. I. p. 286)と語らしめたと考えられる」と述べている。そし

て、さらにその歸結として、「アー जी・ヴィカに對するゴータマの批判は、ゴースーラの努力無用論と業思想の否定が、特にゴータマにとつて、嚴しい批判となつたようである」としている。

しかしながら、これは前述したように、ローカーヤタ學派、アー जी・ヴィカ學派のいわゆる佛教からいう外教思想においては、對象と次元を異にしてカルマ(業)の思想・法則を論じ、且つ認めていたのであり、いわんやそれが安易にして怠惰な努力無用論や運命論に直結したり、直線的な無因無縁論を意味するものでもない。外教思想(自由思想)においては、カルマの思想の適用範圍と方法を、科學的に證明・説明することを要請したので、佛教等の行なう觀念論的推論を否定したのである。まさに「空想より科學へ」である。むしろ、佛教内部においてすら、ゴータマ・ブッダの説いた窮極の眞理である「因縁」説を、通俗なる因果論と同置曲解している點が多々あるのを指摘できると思う。

さて、ジャンカラがその『ヴェーダーンタ・スートラ』への註釋(III, 3, 53)に引用している「肉體から離れて靈魂が存在する」という見解に對するローカーヤタ學派の論駁は、前述來のこの學派の科學的推論を認める立脚點を明示する好例である。すなわち、「……もしも、あるものが何らかの他の事物が存在する場合にのみ存在し、他の事物が存在しない

ときには存在しないならば、このあるものは他のものの屬性と呼ばれる。例えば、光と熱は火の屬性である。ところで、生命・意識・記憶・運動等について考えてみるのに、靈魂が肉體に依存ないし附隨しないで獨立で存在すると考える人びとは、これらの諸概念(ないし働き)は靈魂の屬性であるとなししている。しかし、事實において、これらの諸概念(ないし働き)は肉體の中において、もしくは肉體と關連して見出され、肉體の外、もしくは肉體を離れて存在することは感得ないし證明できない以上、そこから結論として、これらが當然肉體の屬性であるということが導き出される」と。この斷片の示すところは、疑いもなく、ローカーヤタ學派が論理的推論の委細に通曉しており、觀念論上の抽象命題を論駁するために、實際にそれを適用したということを明示しているといふことができる。

倫理學、いなむしろ實踐的生活倫理の部面においても、ローカーヤタ學派は、人間の與かりうる一切の自然の恩恵による生活を楽しむことが「自然なもの」であるとみなした。この見解は、民衆の廣汎な支持と共感をうけた。まさに、ローカーヤタ學派が「順世」と呼稱されるゆえんであるが、これは從來しばしばいわれたように「快樂論」(Hedonism, Epicureanism)を意味するものではなく、「自然主義」(Naturalism)の哲學思想であることに注目すべきである。

1 拙稿「インマ古代思想發生についての一視點」(『金倉圓照博士古稀祝賀記念論文集』所收) 參照。

2 Mahāvachārya: The Sarva-darsana-saṅgraha, Chap. 1, Ldh, 1882.

3 伊原照運教授「マંダナミシュラの年代」(『宗教研究』三七(四)によれば、シャーンタラクシタのティベツト入國を七六一年以降、歿年を七九〇年、「タットヴァサンガラハ」を七六〇年までの在印中の著作とし、これによつてカマラシーラのインマ活動時期をおおむね七五〇〜七九〇年と推定している。

4 Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Comm. (pañjika) of Kamalaśīla, Gaekwad Oriental Series xxx, Vol. 1, Baroda, 1926, p. 431.

なお、宮坂有勝教授「シャーンタラクシタの傳える唯物論哲學——Tattvasaṅgrahapañjikā, Chap. xxii を中心として——」(『密教文化』七一・七二) 參照。

5 雲井昭善教授「アーजीヴァカについて」(『大谷學報』四〇の1)。

6 拙著『釋迦』(三三書房) 參照されたし。

7 Sankaracarya: Vedānta-sūtra-bhāṣya, SBE, Vol. 38, p. 269.

新刊紹介(八)

宇井伯壽「印度哲學研究Ⅱ全12卷」

- | | | |
|------|--------|----|
| 1 卷 | 印度哲學研究 | 第一 |
| 2 卷 | 印度哲學研究 | 第二 |
| 3 卷 | 印度哲學研究 | 第三 |
| 4 卷 | 印度哲學研究 | 第四 |
| 5 卷 | 印度哲學研究 | 第五 |
| 6 卷 | 印度哲學研究 | 第六 |
| 7 卷 | 印度哲學史 | |
| 8 卷 | 攝大乘論研究 | |
| 9 卷 | 禪宗史研究 | |
| 10 卷 | 禪宗史研究 | 第二 |
| 11 卷 | 禪宗史研究 | 第三 |
| 12 卷 | 佛教思想研究 | |

A 5 判 岩波書店刊